

知恵の樹

No. 139 2009. 5.20

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局：町田市森野 3-1-12 増山方
〒194-0022 FAX 042-722-1243

心ドキドキ・魂イキイキ アニマシオン ～フランスの読書教育の現場を訪ねて～

増山正子

読書へのいざないの一つに「アニマシオン」という技法があるのを知ったのは、1999 年秋、誘われてスペインのモンセラット・サルトさんの「アニマシオン・セミナー」に参加する機会を得たときである。はじめて耳にする言葉であったが、既に我が家庭文庫には『読書で遊ぼう アニマシオン』（柏書房）という本があった。文庫オープンの際、小河内芳子さんより寄贈されたものだが、タイトルだけを覚えていて、内容については全く把握していなかった。にわか知識を詰め込んで、児童図書館研究会一向の仲間に入れてもらってスペインに出かけたのである。その時の報告は、当会報 39～42 号に 4 回に亘って掲載しているのでお読み下さった方もおられると思う。

セミナーを受けて、「読書のアニマシオン」というのは何も目新しいことではなく、我々が子どもと本を結ぶ手段として、おはなし会等で行っている「ストーリーテリング」「読み聞かせ」「パネルシアター」等々もアニマシオンで、それをいかに行うかの手法を意味するものであると理解した。ストーリーテリングでも読み聞かせでも、受け取る相手の心を動かし魂を活性化させなければ、アニマシオンとは言わないのだ。

モンセラットさんの〈作戦〉による読書への誘いよりも、私にはセミナーのあと訪問した小さな町ペニャランダでの「社会文化開発センター」の活動の方が、興味深かった。図書館は、町の文化的生活中核となって人々の日常に結びついた図書普及のためのさまざまな活動を行っていた。読書に限らず、社会文化活動全般において多岐にわたる活動のどれもが利用者サイドに立った柔軟な考えの下に企画されており、市民が自ら主体的に明るく楽しく精神の躍動を感じさせて深く関わられるように、

ユーモアとセンスをもって「事」にあたるためのプログラムが立てられているのである。これは、2 度目に訪問したフランスの社会文化アニマシオンに通じるものであった。

日本にはいち早く、スペインのモンセラットさんの「読書のアニマシオン」が広がっていき、〈作戦〉を使っているアニマシオンがアニマシオンの全てであるかのように、「アニマシオンは嫌い！」という人に何人か出会ったが、多分良く理解されていないからだろう。「アニマシオン」の源流をたどれば、第 2 次世界大戦で疲弊した人々に何とかやる気を持たせようと、フランスを中心に起こった社会文化アニマシオンに行きつき、社会文化全体に及ぼす広義なものなのである。何か物事に取り組もうとした時、面白くもないがただ義務だからと仕方なく行くと、心を躍動させ楽しく取り組むのとどちらが良いかを問われた時、きっと「アニマシオンは嫌い」という答えは出てこないだろう。

社会文化アニマシオン

広義のアニマシオンをもっと深く知りたいという事で、2 回目は、フランス文化に造詣が深く仏文学の翻訳者でもあり作家でもある辻由美さんにコーディネーターと通訳をお願いして、2006 年春、子どもと読書に関係のある人たちと共に、フランスの「社会文化アニマシオン」13 日間の研修にでかけたのである。

パリ郊外にある「青少年民衆教育国立研究所」に寝泊りしながら、フランスの国策として行われているアニマシオン政策を学んだが、これについては、受講した全記録の報告集を出しているの、興味のある方は、町田の図書館にも寄贈したので、ぜひ手にとってお読みいただきたい。

〈その中から辻さんの一文を次に引用〉

「アニマシオン」という言葉は、長い間私にとってフランスでごく当たり前によく目にし、耳にする言葉だった。たとえば、9月になって新学期がはじまると、地元の図書館が「アニマシオンのプログラム」を発表し、それが新聞に載ったりした。この場合、アニマシオンとは図書館の行事のことで、たいいて明確なテーマをめぐって企画されていた。「孤独」といったやや抽象的なものもあれば、「グローバルゼーション」のような、もう少し具体的なテーマもあった。図書館の蔵書の中からそのテーマに関連する本が前面に出され、それについて講演やディベートが組織されていた。/今にして思えば、このアニマシオンは「図書館発見へのいざない」だった。図書館に行くと、私たち利用者の足は、ひとりでに自分の関心のあるコーナーに向かってしまう。だから、通いなれた図書館でも、意外なほど狭い範囲でしか書架を見ていないことが多い。だが、ひとつのテーマは常に多数の分野にまたがる。たとえば「孤独」なら、心理学からアプローチすることも、現代社会の問題としてとらえることもでき、小説や物語の題材でもある。こんなふうなテーマがひとつ設定されると、文学と社会科学、自然科学と芸術といった、普段はけっして一緒にされない本が肩を並べることになる。それが利用者の興味を刺激し、「あっ、こんな本もあったんだ」という発見につながる。これこそがアニマシオンなのだ。(『フランスの社会文化アニマシオン研修記録』から)

2 回目の研修旅行は、講義中心で、子どもたちの実践現場を見る時間がなかったことが心残りとなった。そこで、読書教育現場を見てみたいということで、再度辻さんにお世話願って、この3月末、再びフランスを訪ね学校や図書館でのアニマシオンプログラムの実践を見て回った。といっても、3回の研修は全て佐藤涼子さん団長の下、私は金魚の糞よろしく一向の後にくっついていったに過ぎない。

社会性を身につけるアニマシオン授業

見学した先は、①小学校2,3年生の児童文学による読書教育の国語の授業、②中学校図書室でのTT授業(読書のアニマシオン・調べ学習)、③科学



産業都市図書館(図書館でのアニマシオン) ④パリ読書センターによる幼稚園での読書アクション



⑤幼稚園児、小1年生によるクロノス賞候補作のディスカッションと投票、⑥中学校での新聞授業、⑦高校での「ル・ボン」誌編集長の話と生徒との交流、である。

10日間の滞在中、毎日地下鉄に乗り(ゼネストで交通機関がマヒしたときはタクシーで)、地図を片手に学校を探し当て、チブンカンプンのフランス語での授業を見て回った(終了後大要通訳)。言葉が分からない分、子どもたちの様子を観察できたが、様々な人種が融合している中で教師も子どもたちも実に快活と活発な授業が繰り広げられていた。

小学2,3年生のミックスクラス(22人)では、児童文学をテキストに90分間休みなく活発な授業が続けられた。先生は、子どもたちの間をくまなく歩き回り、時には机に片足を乗せて子どもたちに語りかけるなど言葉のキャッチボールが楽しく続けられていた。

図書館の一室で、司書が幼稚園児にクロノス賞候補作の絵本5冊のディスカッションをさせ、子どもたちが好きな本を1冊選び投票する場合は、選挙と同じように投票箱の前に管理人(通常おばあちゃん)が座って真剣に行われた。自分が一票投じた絵本が1位になった時、大きな歓声が上がった。⑤

読書センターによる読書アクションをしている幼稚園では、クラスをバラバラにして異年齢の子どもと一緒に「マスク」をテーマに授業が行われていた。センターが集めた90枚の「仮面の絵」をバラバラにして子どもたちがその仲間分けをし、タイトルをつけ自分の仮面も作り上げて最後には全員で仮面博物館に出かけるという。一人ひとりの子どもの発した全ての言葉が書きとめられ木の枝のように伸びた図が貼ってあったが、2,3歳児が、アニメーターの声に静かに耳を傾けているのには感心した④。

紙面の都合上大雑把な記述になったが、今回も全体の報告集を出す予定。詳しいことは是非それを読んで下さればと思う。

辻由美著『読書教育』(みすず書房)もご一読を!

「市民のための図書館を求めて～ 行革と民営化の流れのなかで～」

市民と職員の手で、現状の図書館の改善・変革を図る

2009・3・14(土)14:00～17:00

於:町田市立中央図書館6F ホール 44名

昨年11月に『図書館の基本を求めて II』(大学教育出版)を出された田井郁久雄さんを、再び町田にお呼びして表記の会を催すことができました。今回は、揺れ動く図書館の現状と、田井さんの目を見た「市民のための図書館」として頑張っているところ、また話題に上った図書館の実情などをお聞きました。当日は、町田市27名の他、近隣の市区や、遠くは草加・柏・流山からも参加していただき、関心の深さが窺えました。なにより嬉しかったのは図書館職員の顔が多く見られたことです。図書館現場のスライドを映しながら、分かりやすく具体性に富んだ講演内容の概要を、主観を交えて、かいつまんでご報告します。

どのような図書館を求めるのか — 東京都と滋賀県の図書館統計数値の比較から

東京と滋賀は、よく似通っている面と、正反対の面があり比較し易いとして、その対比を説明。

- よく似通っている面
 - ・人口10万人あたりの図書館数、
 - ・一館あたりの貸出点数
 - ・人口一人当たり貸し出し点数など
- 正反対の面
 - ・貸出1冊当たり推定総経費・・・滋賀119円、東京216円と、東京は滋賀の2倍近い経費をかけている。
 - ・正規職員中の有資格者の率・・・正規職員数(人口10万人当たり)については、東京19.1人・滋賀15.3人と大きな違いは無いが、有資格者率についていえば東京37.3、滋賀80.9と資格を持った職員の数は、滋賀が圧倒的に多い

・委託・派遣職員数

(人口10万人当たり)・・・滋賀は0、東京都は15.5人

・全職員1人当たり貸出点数・・・滋賀30,800冊、東京15,800冊。滋賀の職員が2倍の仕事をしている。

正規職員数はさほど差はないが、司書の数・有資格者率は滋賀が約2倍多く、全職員数は東京都が2倍近く多い。

経費削減のために指定管理制度を導入するというが、民営化が進む東京(主に23区)は、図

(『日本の図書館 2007(FD版)』によ

東京都と滋賀県の図書館数値の比較	東京都 順位		滋賀県 順位	
人口10万人当たり図書館数(館)	3.1	15	3.4	12
一館当たり貸出点数(千点)	258	8	285	6
人口一人当たり貸出点数,市区町村(点)	7.9	2	8.3	1
人口一人当たり貸出点数,県立含む(点)	7.9	2	9.1	1
人口10万人当たり正規職員数(人)	19.1	1	15.3	3
正規職員中の職員有資格者率(%)	37.3	37	80.9	1
人口10万人当たり全職員数(人)	50.1	1	29.5	5
人口10万人当たり委託・派遣職員数(人)	15.5	1	0	47
人口一人当たり図書館費(円)人件費以外	1,718	1	1,083	5
人口一人当たり推定人件費(円)	1,525	1	1,225	3
人口一人当たり推定図書館総経費(円)	3,243	1	2,307	3
全職員一人当たり貸出点数(千点)	15.8	38	30.8	1
貸出一冊当たり推定総経費(円)	408	34	254	2

注)人件費の数値は『日本の図書館』では調査されていないため、(正規職員数×800万円)を推定人件費(給料、手当、共済費)とした

書館総経費・人件費・図書館費など、直営の滋賀に比べて、2倍お金をかけていることが分かる。滋賀が大事にしてきた、従来の基本的な図書館サービスが、高い効率結果を出していることがこの統計数値から窺える。

(1館あたりの貸出冊数:1位横浜、2位愛知。横浜は20万人に図書館は1館、東京都の1/6の数)。

話題の新築図書館(主に首都圏、民営化)の特徴

- ・休館日が少なく、開館時間が長い
- ・建物が大型化し、カウンターの手配、ICタグの導入などハイテク化、機械化が進み、ビジネス支援が提唱されている。

稲城市・川口市・千代田区・豊島区・さいたま市・府中市・長崎市など、最近民営化((委託・PFI など)された図書館のカウンター周辺の映像を見ながら、説明をしてくださった。

委託が一番多いのがカウンター業務であるが、カウンターは、利用者と触れ合う大切な接点。暖かいサービスは、高い数値に表れる。田井さんが普段利用している岡山市の幸町図書館は小さい図書館ながら、年間100万冊の貸出をしており、カウンターはいつも利用者で賑わっていると、資料と職員を大事にした図書館のカウンターの様子をいくつか見せて下さった。民営化、機械化はされていないが、職員がイキイキと働いているカウンターでは、本を抱えた利用者との交流が見られ、ホンワカした空気が流れているのを感じる。田井さんが見て回られた従来の図書館カウンターとハイテク化の図書館の映像を比較して見ても、賑わって楽しそうな図書館と、閑散としていて職員同士のおしゃべりや手持ちぶたさの様子が見て取れる図書館の違いは明らかで、「大事な仕事を機械に奪われた寂しい職員像」を感じた。

図書館と経費——厳しい財政事情の中で、税金は適正に使われているか？

税収が落ちている中で避けて通れない問題として、マスコミ報道の過熱にさらされた「矢祭もったいない図書館(1,070平米/9:00-18:00開館時間)」を事例に挙げられた。

矢祭の人口は7千人。建設費(改築費)1億2千万円をかけ、資料費ゼロ、寄贈本をあてにして図書館を作った。2006年7月から全国に本の寄贈を呼びかけ、オープン時には30万冊が集り、200人近いボランティアが本の整理をした。当初3万冊だった開架書架を5万冊に増やして開館。マスコミが感動的図書館として取り上げたことにより寄贈本が殺到し翌年7月で打ち切ったが、その数43万冊以上にもなり、寄贈本を捨てるわけに行かず書庫を増設、その費用に1億9千万円かかった。財政難の策であったはずだが、結局、単価2千円の本を4万冊購入する額8千万円の倍の資金を書庫にかけるという結果になった。どこからそのお金が出たのか、税金の使い方に疑問をもつ。細かいところは議論するが大きいのは議論されないという典型的なもの。マスコミによる図書館評価にはかなり問題がある。矢祭の例以外にも財政難に関わらず巨額の公的資金が、建物や設備に使われる例が多く見られるという。

図書館の原点は、資料費と職員にお金をかけること・・・機械化・ハイテク化による経費と、職員問題

ICタグ(1枚の経費は¥690もかかる)、自動貸出機、返却本自動仕分けシステム、予約図書受渡しシステム、ベルトコンベアー式ブックポスト、自動化書庫など、図書館における機械化が進められているが、ハイテク化の経費・維持費は膨大である。

委託化して機械を入れて人件費を少なくするという図書館が昨今増えているが、機械化によって図書館運営はブラックボックス化し委託の経費が見えなくなっている。機械を導入することで、果たしてサービスは向上されているのかどうか、市民は税金を有効に使っているかチェックしていかなければならない。また機械化される事で、職員が効率的に仕事ができるかどうか疑問である。例えば、自動化書庫は本を特定しなければ探せない。どんなのがあるのか見る事ができない書庫は、効率よく仕事ができるとは思われない。

岡山県立図書館はオープン時に IC タグをあえて入れなかったが、そのことは決してマイナスにはなっていない。資料費と職員にお金をかけた運営の方が、サービスの効率が良いことは、東京と滋賀の例を見ても明らかであり、岡山についてもいえることである。

また、ハイテク化することでの問題点は、全体の経費を減らさなければならないという時に、機械類にかかるメンテナンス費用は削ることができないため、資料費と職員にしわ寄せが来るということである。

新しいサービスは成功しているか

新しいサービスと謳われたジネス支援の実態は、成功しているとは思えない。図書館の職員の 6 割が非正規という状況の中で、非正規である職員が就職支援をしている現状をどう見て取ればよいのか。また、「課題解決型図書館」と銘うってはいるものの、貸出を重視した文化教養型図書館の方が相談が多いという実情をどう捉えるか……。他にも、開館と同時にピアノを弾いてくれる図書館や、コンサートを行っている図書館などを紹介してくださったが、図書館がある意義とは、豊富な資料と有能な職員がいて、何でもそこで借りられて読めるということにある。

直営の図書館 — 民営化への流れと問題点、民営化への対応

図書館運営には、継続性と責任(立案、実践、変化・発展への対応など)、長期的視野に立った蔵書の収集、保存、提供、職員体制の継続性と専門職の育成が求められるが、果たして民営化されることで、それらに対応できるかどうか、行政内部の責任体制、法律上の問題点等を考えねばならない。

また、地域性が大事であるとして、図書館が町の本屋から買うことの重要性を挙げ、わずかな経費削減のために地域の本屋を捨て、指定管理で引き受けた選び手と売り手が同じ資料の選定をすることの危うさについて触れられた。

民営化と共に無機質で広々ときれいな新しい図書館ができてきているが、自分の図書館をこうして作って行きたいという地域性がない図書館が目立つ。

市民のための図書館・・・直営でサービスの効率を高める

行政は、直営と民営を比較することなく、民営化そのものを目的としており、それがサービス向上経費削減に繋がると考えている。また比較したとしても、現状体制と比較し、民営化を考える。そうではなくて、常に直営体制の中での改善・変革を模索し、民営化と比較をするならば、必ずや民営化は免れる。

民営は司書比率の向上と非正規化で対応してくるが、重点は非正規化にある。行政は職員の削減を謳うがそれは見かけ上で、決して削減にはならず、人件費は委託費となり中間マージンが受託者に支払われるのだ。

直営でサービスの効率を高めるには、司書比率の向上は当然で、職員数の削減と非正規化(内容はともかく)は実現可能な課題であるとする。そして嘱託司書の勤務条件向上への取り組みも考えねばならない。嘱託司書の月給 20 万という条件を図書館長が当局に認めさせたという自治体の例も挙げられた。

正規職員は、正規職員としての意識、力量、意欲の向上、公サービスの意義を認識し、嘱託司書に比べて責任意識がなくてはならない。

おわりに

新自由主義に対する反省の上に立って、図書館は人間らしく生きるために必要な施設であることを再認識し、自分たちの図書館は、民営ではやれないサービスを展開しているのだと自負できる図書館を職員と市民の力で創造することこそが、「市民のための図書館」としての発展に繋がっていくのではという思いを新たに感じさせてくれた講演会でした。

(記録:片岡/文責:増山)

町田の図書館協議会活動 — 浪江虔先生の遺志を継いで —

町田市立図書館館長 守谷信二
同図書館協議会委員長 水越規容子

さる1月、日本図書館協会公立図書館部会の全国公共図書館総合・経営部門研究集会「市民とつくる図書館」が名古屋で開かれ、そこへ町田市立図書館と図書館協議会が事例発表の機会を得た。以下はそこでの発表を要約したものである。(水越)

守谷: 「市民とつくる図書館」というテーマで、町田の浪江虔さんを紹介する。彼は、1999年に88歳で亡くなった、町田市在住の社会運動家・図書館活動家で、町田の図書館にとっては大変重要な人物だ。彼が力を注いだ市民運動によって町田の図書館活動が切り開かれたという経過があり、図書館協議会そのものもそうした市民運動から生まれた。実は来週の1月28日が浪江さんの没後10年目の命日にあたり、今日発表できるのには、少し偶然を超えたものを感じる。

<町田市および図書館の説明は町田市公式サイトからの画像などを使用し、ここでは省略>



浪江さんの活動をする。1939年、昭和14年に私立

浪江さんは1910年、明治43年に北海道に生まれ、東京帝国大学の美学科に在学中に農民組合運動に従事、終生町田の鶴川に住む。治安維持法違反での検挙・服役などもはさみながら、農村図書館の活動をする。1939年、昭和14年に私立

南多摩農村図書館を開設。当時の蔵書が約7,000冊、月に大人30銭、子ども20銭の利用料金で、1年間で登録者が600人、年間1万冊の貸し出し。終戦直後の多摩地域で健全に活動していた図書館はここだけ。別に部落文庫を作り、地域の分館のような形で部落文庫育成に努めてもいる。その

後1989年に閉館するまで実に50年間、私立図書館を独力で維持し続けた。浪江さんの戦後は、私立図書館活動をベースとした市民運動、あるいは図書館運動といえるが、特筆すべきことは、例えば当時は農業の本があまりないので、ご自身で執筆したり、農文協に関わって農民が本当にわかる農業の本を次々に出版した以外に、1)「中小レポート」の基本的な考え方を全面的に支持しいち早く「図書館雑誌」に評価を書いて普及に努めた、2)町田での地域文庫づくりを積極的に進め、図書館の充実を求める市民運動へとつなげた、3)日本図書館協会にも深く関わり、公共図書館の発展に大きな足跡を残された。石川達三の日記『流れゆく日々』に当時の浪江さんの活動を示すエピソードが出てくる。

<他に浪江氏著作として『図書館運動五十年—私立図書館に拠って—』、『図書館そして民主主義 浪江虔論文集』を紹介>

私が図書館に行った1982年は日野に影響された1970年代の町田の図書館活動のピークが一段落をし、ちょっと停滞している時期だった。日曜開館をまだしておらず、市民と職員で日曜開館をめぐる大議論があった。この時、市民と職員が一緒になって図書館を進める運動をもう一回起こさなきゃ



いけないという話になり、市内の図書館に關係のある団体の連合体の形で 1984 年に「町田市立図書館をよりよくする会」を発足させた(現在は改名して「町田の図書館活動をすすめる会」)。その最初の成果が図書館協議会設置だった。図書館協議会は公式の組織であるが、それを支えているのは「町田市立図書館をよりよくする会」で、図書館見学会や講演会など活発な活動を行った。労働組合の図書館分会も団体加入をしており、市民と職員がそこで一緒に議論をするという感じで、浪江さんから地方自治法の講義を受けたりして勉強してきた。町田の図書館職員また市民にとって、浪江度という図書館人は大変忘れがたい存在である。図書館が地方自治を支える重要な機関である、市民による図書館運動はそのまま自治体の民主化運動なのだ、市民と職員が同じテーブルで時にはけんかしながらでも共に語り合うことが大事なのだということを、浪江さんから身をもって教わった。図書館にとって大変厳しいいま、改めて浪江度という存在から現状を乗り越える勇気を得ている。

水越: 今期で協議会は 12 期目(24 年)の歩みになるが、私自身は生前の浪江先生にはお会いしていない。いろいろな方からお話を聞くたびに、実際に薫陶を受けることができなかつたことを悔やむ。

< 図書館協議会の模様を画像で説明 >

図書館協議会は図書館の専門家もいるが、むしろ半数は市民の集まりで、その都度提言を出したり、要望書提出などを毎年のようにしてきたが、実は数多くの提言を出したにも拘わらずあまり実になっていないともいえる。ここ数年の協議会の実績を紹介すると、1990 年代の後半は特に全国的な学校図書館充実運動の動きが町田にも及び、協議会では市内の学校図書館を見学、人の配置につなげた。だが劣悪な町田方式ということで有名になっている。2003 年に市内 12 校を抽出、読書調査をした。学校の先生方が授業の時間を割いて大変協力してくれたことはありがたかった。その結果を

踏まえて「子どもに豊かな読書環境を」の提言、だが必ずしも実現していない。

2006 年には病院図書館の問題が浮上。新しく市民病院を建て替える時には患者図書館をつくる話が前市長とは約束事としてあったが、これが難しいという話が出て、急遽協議会でいろいろ話し合い実現を求める要望書を提出。同時に、すすめる会や職員も中心になって患者図書館についての勉強会を開き、一般市民にも患者図書館の大切さを訴えたりはしたが、残念ながら実現していない。図書館協議会独自にそれぞれの任期ごとのテーマを決めて、検討して提言をすることをやってきたが、ここ 2~3 年はまるで火の粉のようにいろいろな問題が次から次へと降ってわいてくるので、必死にそれを阻止するために動くことで手いっぱいというのが実情といえる。

例えば、図書館の中に組織的に位置づけた文学館の移管の問題。いわゆる博物館的な文学館ではなく子どもたちの文学に対する関心などを高めるような、教育にも関連したプログラムを積極的にできる文学館、図書館としての機能を持った文学館が誕生したが、2007 年に文学館を図書館から切り離して市長部局へ移管するという話が突然持ち上がった。この時も急遽協議会で 2 回ぐらいかけて検討した末に反対意見を文書にし、教育長や教育委員長とも懇談をした。結果的には、市長部局への移管はなくなった。次に「事業仕分け」という話が降ってわいた。町田市の様々な事業が 40 ぐらい選ばれ、外部の仕分け人が評価をするという話で、図書館民営化のステップではないかと危機感を募らせた。< 画像で紹介 > 協議会委員全員をはじめ、図書館職員、市民が多数参加し、図書館の時の傍聴がとても多かった。町田には図書館に関心のある人がこんなに多いというアピールにはなった。

現在は鶴川駅前図書館が懸案事項で、市民と行政との協働の図書館づくりとして計画が進行中。これについても随時検討を重ねていきたい。



ひろば

<3月例会報告> 18日(水)
16:30~会報印刷(鳥尻)
18:00~20:00 例会
於・中央図書館中集会室

出席/石井 伊藤 片岡 斎川
高橋 前島 水越

○2009年度世話人・・・欠席者多数のため、次回に回すことに。会計は片岡さんが引き受けてくれる。
○今年度活動案について・・・講演会については、講師候補として中川幾郎氏(帝塚大学・法政策学部教授、『図書館は人作り』の著者)が挙げた。名古屋での公共図書館の会合に出席した折に「市民とつくる図書館」の講演を聞き、大変分りやすくまたおもしろい講演であったので(水越)。他に4月の例会時まで考えてくる。

○編集について:今回は職員の記事が多く、楽しく読めた。いつも記事集めが大変と聞いているので、埋め草のつもりで書ける人は書いて増山まで送っておいたらどうかとの提案あり。高橋が連載でエッセイ風の記事を書いてくれそう。

○田井氏の講演会の報告反省など

<4月例会報告> 15日(水) 18:00~20:30
会報休刊
於・中央図書館中集会室

出席/伊藤 片岡 川野 久保 斎川
鈴木 高橋 手嶋 前島 増山
桃澤 守谷 山口(洋)

○2008年度会計報告(前島)

・会費収入 38,000円(含・市職労会費 1万円)の内、会報郵送料に約2万円の出費は大きすぎる。出来るだけPCメールで送って、出費を抑えては?
○今年度の世話人は、またも次回に話合う事に。

町田・学校図書館 4月定例会 報告

11日(土)10:30~12:15 公民館6階フリースペース

出席:清水・谷釜・水越・市川

・総会について、集いについて話し合う
・学校図書館見学について/7校見学終了、月2~3校の見学予定で進行中

○例会:毎月第2(土)10:30~公民館フリースペースにて開催。会員・関心のある方、ぜひどうぞ!

2009年度 第3回 文学館(主催)で楽しむ

おとなのためのおはなし会

6月18日(木)10:30~11:30

町田市民文学館 2F大会議室

プログラム

町田の作家「峰 隆一郎」の作品から
「ラプンツェル」(グリムの昔話)
「一本松の狐」(町田の昔話)
「青い花」(安房直子作)
<語り:まちだ語り手の会> 直接会場へ! 保育



永田
大沢
原
西村

○現鶴川図書館の存続が決まり、鶴川駅前図書館と立体的に運営する方針がほぼ確定。

○嘱託員組合は、2月に行った市側との団体交渉により、出産・育児・介護・病気・生理などの休業と育児時間が無休ながらも、権利として認められ、今年度の契約書に明記された。今後も2日しか認められていない忌引き、まったく認められていない結婚休暇や文学館嘱託の残業時間問題など、働きやすい職場改善に向け取り組んでいきたい。

○会のリーフレット、『新 図書館の発見』読後の話合いのまとめ、「市民が作る町田の図書館政策」、等、未決の作成をすすめること。

○市長の一言で降って湧いたように出てきた野津田公園のサッカー場問題。自然団体が署名活動に。
○新会員紹介:鈴木薫さん(都立南大沢学園特別支援学校高等部普通科教諭)。どうぞよろしく!

★総会とつどい・町田の学校図書館を考える会/5/30(土)中央図書館6階中集会室/総会 13:30~ / つどい 14:00~16:00 岡山のビデオ上映、ブックトーク、交流会他/問: ☎&F 042-797-9579(伴)

★ひらこう! 学校図書館第13回/6/20(土)10:40~16:30/日本図書館協会2階研修室/竹内哲氏講演「子どもと本の世界とを結ぶ人」、加藤容子氏実践報告「学校図書館で何ができるかを考えて」意見・情報交換/問:042-723-8887 水越

あとがき 田井さんの講演会をまとめていて、図書館を発展させるために重要なことは、常に「これでいいのか、もっといい方法はないのか、を考え模索し実践する」という一言に尽きると思った。それも顔をしかめてやるのではなく、ユーモアとセンスと躍動感をもって。受益者(利用者)の立場に立てる職員、職員の立場に立てる利用者(何人いるかな?) が、共に「市民のための図書館政策」を作り、楽しいアニメーションプログラムを展開し、町の人々はそこに集う……。いいねえ! (M⁴)